

残る看護は何だろう 一何を引き受け、何をまかせるのか

東京医療保健大学 副学長
坂本 すが

超高齢社会を迎え、病院から地域・在宅のさまざまな場で、看護への期待が高まっている。看護がその専門性を発揮し、現在から未来にわたって社会のニーズに応えていくためには、1人1人の力を高めるとともに、他の職種やICT（情報通信技術）の力を借りて、これまでにない新しい価値を創造することが必要だと考えている。国が目指すべき未来社会として提唱された“Society 5.0”でも、IoT（Internet of Things、物のインターネット）で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有されることで新たな価値を生み出し、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題の克服を目指している。

こうした中、看護も過去を振り返るのではなく、先を見て考えることが大事だと思う。

この先、患者像はますます複雑・多様になるだろう。治らない、慢性的な病気を抱えながら暮らす人、あるいは独居や認知症など複雑な状況にある人々を、地域包括ケアシステムの中で、いかに支えていくか。これは大きな課題であり、看護の腕の見せ所である。私見だが、看護師は“間隙手”であると思う。医療の視点と生活の視点の両方から、病む人を見て、必要な医療・生活ケアを統合し提供する力がある。ただし、看護だけの力では解決できない。冒頭でも述べたとおり、他者の力、医療職に限らず介護職・家族とも力を借りて、最善の方法を編み出すことが期待される。

一方で今後、経済の劇的な回復が見込めない中で、日本は未曾有の人口減少社会に突入する。これを逆にチャンスと捉え、日本の看護がアジア・世界に先立って、明るく向かっていくことはできないだろうか。そのために、どのような働き方改革ができるかである。

1つは、子育て・介護など様々な状況にある看護職たちが、元気で自信をもって働き続けられるよう、全国共通のクリニカルラダー認証制度の整備も期待される。また、認定看護師や特定行為修了看護師など、多様な力をもつ看護職もますます活用されるべきである。さらに、タスクシフティングという観点から、定年後の看護職（プラチナナース）、外国人、AI（人工知能）を活用する仕組みも積極的に検討すべきと考えている。看護に革命を起こすために、管理者の意識改革が必要だ。

留意すべきは、単純にタスクシフトして効率化を進めよというのではない。他の職種や機械に代替されない看護とは何か、私たちは考え、他者にもわかるように伝えなければならない。残る看護は何だろう。私たちは何を引き受け、何をまかせるのか——。「療養上の世話と診療の補助」という目に見える看護以外に、目に見えない看護の力＝人々の生きる力を引き出す力が、地域包括ケア時代の看護のカギとなるだろう。

略歴

和歌山県出身

1972年 和歌山県立高等看護学校保健助産学部卒業

1976年 関東通信病院（現・NTT 東日本関東病院）入職

同産婦人科病棟棟長などを経て、1997年～2006年看護部長を務める

2006年 東京医療保健大学看護学科学科長・教授就任

2007年 埼玉大学大学院経済科学研究科博士課程修了

2009年 中央社会保険医療協議会専門委員

2011年6月～2017年6月 公益社団法人日本看護協会会長

2017年6月より現職